

質問文の呈示形式の違いが記憶パフォーマンスの予測に及ぼす影響

- VVIQ(視覚イメージの鮮明性に関する質問紙)を視覚呈示または聴覚呈示形式で行った場合の比較 -

北神 慎司

(京都大学教育学研究科)

key words : 視覚イメージ, VVIQ, 個人差

VVIQ(Vividness of Visual Imagery Questionnaire)は、文字どおり視覚イメージの鮮明性を測定するための自己報告式質問紙であり、イメージ能力テストとして Marks(1973)が開発して以来、その質問紙自体の信頼性および妥当性が検討されてきた。イメージに関する質問紙を被験者に回答させる際に、問題の一つになると考えられるのは、質問項目が視覚呈示されること、つまり質問紙を配布して、被験者がある文を読みながらイメージを想起するという一連の作業についてである。イメージと知覚が同じモダリティーに関係している場合(例えば、視覚イメージと視覚)に、処理資源の競合から相互に干渉を起こす「選択的干渉(selective interference)」ということを考えれば、この視覚呈示形式の質問紙は、目で文字を追いつつながら、視覚イメージを想起しなければならないため、少なからず上記の選択的干渉が起こり、イメージが想起しにくくなると思われる。結局、従来の質問文の呈示形式では、個人の真のイメージ能力が想定できていない可能性が残される。したがって、干渉が起こらないよう視覚イメージを容易に想起させるためには、イメージと同じモダリティーに依存しない、つまり、被験者は質問項目を聞きながらイメージを想起するという聴覚呈示形式のほうが、質問の呈示形式としては適しているのではないだろうか。そこで本研究では、視覚イメージの鮮明性の個人差がパフォーマンスの差異に明確に反映されていることが示されている、菱谷(1982)の「3名詞連合課題」という一種の記憶課題を用いて、視覚および聴覚の呈示形式の違いが、課題のパフォーマンスの予測にどのような影響を与えるのかを検討する。

【方法】

被験者: 大学生 223 名(視覚呈示 96 名, 聴覚呈示 127 名)

材料:

VVIQ - 視覚イメージの鮮明性を測定するための質問紙。

3名詞連合課題 - 名詞 3 語を組み合わせた場合の統合 I 価(統合イメージ価)が 4.1 以上のものを 4 組(以下「H セット」)、同じ統合 I 価が 2.1 以下のものを 4 組(以下「L セット」)を、菱谷(1980)の表の中から選び出し、3 名詞連合課題の学習材料とした。さらに、統合 I 価が 2.8 から 3.1 である 4 組は、パuffaとして用いた。

手続き: 実験は、VVIQ における視覚呈示および聴覚呈示形式とに分けて、それぞれ集団により行われた。まず、VVIQ が教示を含めて約 10 分間で実施されたが、視覚呈示形式では、従来どおり質問紙を配布し、被験者は教示を受けた後、自分で質問文を読みながら、それぞれの項目について回答した。また、聴覚呈示形式では、被験者は実験者によって読まれる質問文を聞き、対象となるイメージを想起した後、回答を記入する形で行われた。各呈示形式で VVIQ が実施された後、それぞれ同様の、3 名詞連合課題に関する手続きの説明と例題の説明が行われた。課題では、パuffaを含め 12 組の学習語が、1 組(3 名詞)20 秒間ずつ OHC によりスクリーンに呈示された。続いて、5 分間の挿入課題が行われた後、学習単語の自由再生が求められた。

【結果と考察】

視覚呈示形式で行われた VVIQ の上位得点群 30 名を「V-H 群」

群」、下位得点群 30 名を「V-L 群」とし、同様に、聴覚呈示形式で行われた VVIQ の上位得点群を「A-H 群」、下位得点群を「A-L 群」として、3 名詞連合課題の正再生数について検討した。各呈示形式における正再生数の平均値は図 1 および図 2 に示すとおりである。

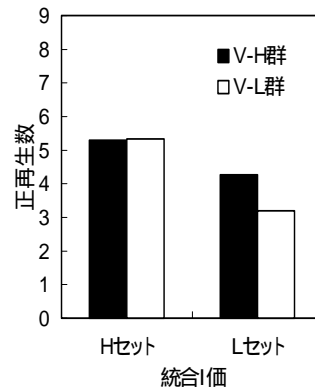


図 1 3 名詞連合課題における正再生数 (VVIQ は視覚呈示)

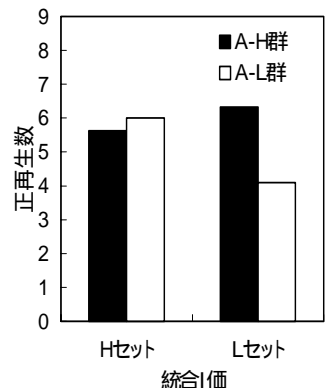


図 2 3 名詞連合課題における正再生数 (VVIQ は聴覚呈示)

まず、視覚呈示形式により行われた VVIQ の得点をもとに、上位群、下位群を分けた場合について、イメージ能力 (V-H 群・V-L 群) × 統合 I 価 (H セット・L セット) の 2 要因分散分析を行った。分析の結果、統合 I 価の主効果のみが有意であった ($F(1,58)=14.02, p<.001$)。つまり、統合したイメージを形成しやすい単語のほうが、形成しにくい単語よりも再生成績がよいことが示された。

次に、聴覚呈示形式により行われた VVIQ の得点をもとに、上位群、下位群を分けた場合について、イメージ能力 (A-H 群・A-L 群) × 統合 I 価 (H セット・L セット) の 2 要因分散分析を行ったところ、イメージ能力 × 統合 I 価の交互作用が有意であった ($F(1,58)=7.87, p<.01$)。図 2 に示されている結果のパターンは、菱谷(1982)の実験 2 で得られた結果のパターンと類似している。菱谷はこの結果について、イメージ能力の高い被験者は、イメージ化が容易であるため、統合 I 価が高くても低くても記憶成績は変わらず、逆にイメージ能力が低い被験者は L セットの学習語に対して、イメージ化が十分行えないため、H セットに比べて課題成績が低くなっている、と考察しているが、本研究では、従来の形式である視覚呈示の場合よりも、聴覚呈示形式の場合において、このような個人差が記憶成績に明確に反映されていると考えられる。

【文献】

菱谷晋介 1980 具体名詞の単一 I 価と統合 I 価 九州大学 教養部哲学・心理学科紀要「テオリア」, 23, 97-117.

菱谷晋介 1982 記憶に及ぼすイメージ能力と課題特性の関連性の効果 教育心理学研究, 30, 22-28.

Marks, D. F. 1973 Visual Imagery differences in the recall of pictures. *British Journal of Psychology*, 64, 17-24.

(KITAGAMI Shinji)